

滝口宏の学知形成過程と大学の調査研究

——十五年戦争期から八重山学術調査における「郷土史」の再編——

柳 啓 明

はじめに

本稿は、早稲田大学の教員だった考古学者の滝口宏個人の学知の形成過程について、早稲田大学の学生・教員となる十五年戦争期から自身が団長を務めた一九五九年の八重山学術調査団の期間について記述することで、大学が生産する学知が大日本帝国の崩壊と占領下での再建のなかでいかなる再編を経たのかを考察するものである。

早稲田大学歴史館東伏見アーカイブズに収蔵されている「滝口宏旧蔵資料」は、長年収蔵庫の一角を占め、数々の研究者から参照されてきた史料群である。戦後の学制改革や学生運動に関する資料が豊富に存在し、『早稲田大学百五十年史第二巻』の執筆にあたり、主要な史料群となることだろう。しかし、もともとの持ち主である滝口がどのような人物だったのかについては、未だ成果を見ずにいる状況である。ゆえに、史料群の歴史的な価値や性格を理解

するための意義が本稿にはあるといえる。

それにとどまらず、大学が生産する学知の歴史的な変遷を追い、社会における学知の位置づけについて考察を進めて行きたい。滝口は、戦中戦後と一貫して、組織的で学際的な実地調査を伴う考古学に取り組んできた。こうした調査活動にはバックとなる資金や制度、および対象となる社会の信用が不可欠であることから、社会的な変動の影響が反映されやすいと考えられる。戦前に会津八一に師事して行った千葉の発掘調査や応召中の千島の調査から、戦後の占領期を経て、一九五九年に米中央情報局からの資金提供を受けていたとされる米アジア財団の支援のもとで行われた八重山学術調査に至るまで、大きな環境の変化のなかで学知がどのように変化するのかを、また大学と地域社会が学術調査を通じて形成する関係の実態をみながら、滝口が研究上のキーワードとしていた「郷土史」の構成に注目して記述¹して行く。

占領下における学知の形成については道場親信²が、戦後日本のフィールド科学については坂野徹や門田岳久³の研究がある。これらの研究対し、戦中戦後の連続性に着目し、対象とされてこなかった沖縄・八重山社会を視野に入れることを目指す。

一 十五年戦争下における郷土研究

滝口宏は一九一〇年一月二六日、東京市本所で生まれた。一九二三年三月に本所小学校、一九二八年に府立第三中学校を卒業している。中学入学の年に関東大震災に被災し、父と兄を亡くして母子家庭となった⁴。一九三一年三月に早稲田大学附属第二高等学院を卒業し、一九三二年四月に早稲田大学文学部史学科国史専攻に入学、ここで会津八

一に師事し、日本考古学の道に進むことになる。十五年戦争と重なる時期に形成された滝口の初期の考古学はどのようなものだったのだろうか。

在学中の一九三四年二月、千葉県君津郡中郷村にある大規模寺院の跡地の発掘調査に参加し、内務省考証官大場磐雄、史跡保存協会篠崎四郎、東北帝国大生子爵内藤正雄らとともに名を連ねている。⁵⁾ この調査は、奈良時代の布目瓦を発掘し、調査団によりこれが法隆寺から出土したものと同型であるとの見解を示したものである。同年八月には、同県山武具成東町在大富村大字行寺跡で、早稲田大学史学科会津八一研究室の調査として平野元三郎とともに、高さ約四尺の石仏を発掘した。⁶⁾ 滝口は戦中戦後を通じて千葉県を主要なフィールドとして活動することになる。

この時期、会津八一は『法隆寺法起寺法輪寺建立年代の研究』（東洋文庫、1933年）を刊行していた。同書は当時の法隆寺再建・非再建の論争に対し、体系的な方法をもつて参入することを企図したもので、法起寺塔婆の露盤の銘文を根拠としながら再建時期の測定を行うとともに、再建された法隆寺に初唐の影響がみられることを指摘して結んでいる。会津は調査にあたり、内地の博物館のみならず朝鮮慶州博物館長諸鹿央雄や朝鮮忠清南道公州高等普通学校教諭軽部慈恩ら外地の協力者からの資料提供を受け、帝国内部の連携により東アジアの大陸からの影響を考察する考古学の研究体制を構築していた。滝口はこの体制のもとで、法隆寺と千葉を結ぶ調査を始める。

また、民俗学からの影響もある。一九三五年に柳田国男を中心にして「民間伝承の会」が設立され、民俗学を中心にして郷土研究が盛んになる時期であるが、回想の中でドイツの郷土学の流入と民俗学の隆盛を経験したと述べている。当時の民俗学は、人類学や考古学と接近し、伊波普猷の南下説や柳田の北上説など、大日本帝国の地理的空間の境界領域における文化の流れを考察する傾向を持っていた。また、大学のみならず、鳥居瀧蔵の武蔵野会、大山柏の史前研究所にも出入りし、日本考古学の草創期を築いた人物たちのもとで学んでいた。⁷⁾ さらに、千葉県立図書館の橋

本清館長から千葉県郷土室の整備を依頼され、平野とともに考古資料を運び込み、千葉の調査で培った人的関係を頼りながら、展示を完成させている。⁽⁸⁾ 考古学生としての滝口は、戦争が東アジアに広がりゆき、内地と外地を連携する研究体制が構築されるなか、郷土、日本、大陸など帝國的な空間の折り重なりを見出せる知的環境の中で自らの足場を作っていたのである。

早稲田大学教員としてのキャリアは、入隊・応召をはさみながら始まった。一九三七年三月に卒業し、翌年の一月には陸軍に入隊、一九四〇年三月に中尉任官となったのち、一九四一年四月に会津八一の推薦で早稲田大学学徒錬成部専任講師となる。⁽⁹⁾ 学徒錬成部は、一九四〇年一月に田中穂積総長が部長を兼任し、体育局および各部活動を統合することで新設された体育教育を重点的に遂行する組織である。同部は、その目的を「国体ノ本義ニ基キ皇運扶翼ノ確固不拔ナル精神ヲ体得シ、偉大ナル国民ノ先達タルベキ智徳体兼備ノ人材錬成ヲ目的トス」とし、「東亜新秩序建設」を担う人材を養成するものとされていた。⁽¹⁰⁾ 滝口の担当科目を示す資料は見つかっていないが、戦後に考古学や人類学の入門書・概説書を刊行していることから、おそらく歴史や地理科目を担当していたものと思われる。⁽¹¹⁾ その後、複数回の応召をはさみながら、一九四二年六月に早稲田大学附属第二高等学院講師、一九四三年二月に早稲田大学高等師範部講師、一九四四年一月に早稲田大学専門部法律科講師に任用され、これらを兼任した。戦時下の情勢に規定されながら、軍務に関わりつつ、「東亜新秩序」建設の人材を育成する教員としてのキャリアをスタートさせている。

早稲田大学は田中総長のもと、学徒錬成部のみならず、知の生産の側面から見ても全体として諸分野を総合・横断する組織を作り、「東亜新秩序」への協力体制が築かれており、鑄物研究所、理工学研究所、興亜経済研究所などが設立されている。⁽¹²⁾ 戦後に滝口に調査団長就任を打診するか大瀨信泉は、一九四一年五月に社会科学系の教員を中心に組織された興亜経済研究所（一九四〇年設立）の理事に就任した。⁽¹³⁾ また、興亜経済研究所の設立に際して、田中総長を

補佐していた北沢新次郎が「理論は良く弁へて居るが實際は余り弁へぬ」⁽¹⁴⁾との問題関心を持っているように、これらの研究所は現実社会への実用を重視している。戦争の遂行とかかわりながら、適時的かつ実際的な調査研究を志向する領域横断的な総合研究機関の設立は官民間問わずこの時期を特徴づけるもので、例えば企画院の外郭団体として一九三八年九月に近衛文麿を総裁として理事に陸軍中将林桂が就任⁽¹⁵⁾した財団法人東亜研究所が開所し、のちに文学部教員となる西村朝日太郎やマルクス主義講座派の山田盛太郎らが研究員としてここに所属していた。十五年戦争のなかで、国家規模で学際的な知の動員が図られていたのである。

そうしたなか、滝口考古学者としての知見や実績は、大学よりむしろ応召中に培われたものと思われる。一九四四年二月に千島列島へと応召されるが、このときに発掘調査を行っている。滝口は一九八〇年の回想で「千島では将兵百名を連れて兵要地誌づくりで各島を歩いた。エトロフの基地ヒトカップ（単冠）湾の年萌には凹みのはつきり残る堅穴が砂浜にならび、丘からは縄文が多数出た。ウルップ、シムシル、ラシヨワの各島でも発掘する機会があった」⁽¹⁶⁾と述べており、考古学的調査の経験が軍務に活かされていることがわかる。

研究者間の交流も応召中に絶えることはなかった。千島にわたる前に根室で守備隊長をしていた大山柏少佐と面会している⁽¹⁷⁾、会津とも文通を続けていた。会津八一は戦後直後に出版した歌集『山光集』のなかで、滝口からの手紙の中にあつた「シベリアのおほかみ」「こほろぎのあし」との言葉を受けて詠んだ歌を掲載している。

シベリヤのおほかみむれてきこえくるのべのかりほにいねずかもあらむ⁽¹⁸⁾
よをこめてかしくあさげにこほろぎのあしまじりゐてわらふひもあるか

この歌は、滝口が満州に応召されていた一九四一年秋～一二月ごろに詠まれたものである。滝口は、部隊を作つて

数日の野外に出た際に裸火を避けてわずかな火で飯を炊くときどきなかにコオロギが混じることや、極寒のなか連れていた馬が騒ぐので耳を澄ますと遠くに動物のうめき声が聞こえることなどを、手紙に書いて会津に伝えていた。⁽¹⁹⁾ 会津の歌はこれにたいする応答である。

滝口は四回応召、除隊を繰り返しており、これは早稲田大学の教員のなかでもトップクラスであると思われる。⁽²⁰⁾ そして、戦争が学問の中断をもたらしたのではなく、むしろ軍務を通じて考古の経験を積んでいた。滝口は、十五年戦争のさなか、帝國的な規模で実地調査をしながら郷土史を構想する人文知の流れに影響を受けながら学生時代を過ごし、国家的に動員された現場に即した領域横断的かつ実証的な社会科学の流れの中で軍務につきながら教員としてのキャリアをスタートさせ、校務と軍務を横断しながら、一九四五年一〇月に陸軍大尉として千島応召中に除隊す。

二 占領期以降の学制改革と郷土史

(一) 郷土史の再出発

除隊した滝口は占領軍主導の学制改革に関わる校務に追われることになる。それと並行しながら、大学内の考古学の体制を整備してゆく。滝口は次のように回想している。

敗戦後の混乱は激しかった。占領軍の相つぐ日本改造の意図はかなり露骨にあらわされた。この時期の私の仕事は、大学行政官会議の教育関係に出席し、講習会に参加することであった。六三制の提案など今日でも賛成していないが、行政当局はさっさと実行に移してしまった。また若かったわたしにとっては耐えられない日々であった。何人かの人たちと共にいくつかの運動に参加した。⁽²¹⁾

このように滝口は、占領期を占領軍による学制改革への参加に費やした。他方で、一九四九年の新制度以降と同時に学部には属さない本部直属の組織として「考古学研究室」を開き、著書を刊行するなど学術的な活動も行っている。まずは、滝口の学術的な再出発を見てゆく。一九四九年に刊行された初学者向けと思われる概説書『千葉県郷土読本』は平野元三郎（千葉県教育委員会技師）との共著であり、題字を会津八一が書いている。占領期においても滝口は郷土史への関心を失ってはいなかった。一九四九年のオリジナル版を手にすることは出来なかったが、一九五三年に刊行された改訂版には次のように自らの立場を説明している。

郷土史の研究は、単にせまい自分達の住む場所の昔を調べることで満足してはいけません。私たちの生活は、人間全体の生活の一部です。一人一人が切りはなされ、又は一地域の人だけが獨立して生活するということは、もうこれからの世界では許されないのでしよう。とすると、私たちの郷土史は、人間全体の立場から、その一部として考察されなければなりません。本書で広く日本の、また極めて小部分ですが世界の歴史にふれつつ述べてるのはこのためです。⁽²⁾

改訂版は文体を集成したものであるとされ、上記の文書の趣旨は一九四九年時点でも同じものであったと考えられる。そして、「改訂版について」では、一九四九年版が刊行された占領期において、郷土史が経験した危機的状況を振り返りながら、再度その重要性を訴えている。

人が「全人類の一人」としての愛に基づいて、自分の踏んでいる土地を認識することが必要であるのは、申すまでもないでしょう。戦前の郷土愛がともすると狭い偏見におちいり、ゆがんだ愛国心に結びつけられたことに対する反省は、被占領中の日本史教育の中絶・後退からんで、日本の歴史も郷土の歴史までも人々の頭から忘れさせようとなされました。

郷土史を知ることが、人の心を頑迷な一地域人にしてしまうのでしたらおそろしいことです。しかし、一方新しい教育は、児童の頭脳の整理を年齢に応じて認識し得る範囲内に求め、そこから出発して全人類と共に歩み得る人格を形成することに重点を置いております。今こそ私たちは、はっきりと郷土を知り、日本を学び、世界に通ずる道を歩まねばなりません。⁽²²⁾

占領下のなかで、戦前の郷土史が全体主義的な傾向の要因になったとの反省がなされ、それが郷土史存続の危機を生んだと回顧している。おそらく、占領軍による農地改革や、これがある面で肯定したマルクス主義の反封建的な論調がこの危機の内容であると思われる。そして、その危機を乗り越え、郷土史を「世界」や「人類」に開かれたものとするとの展望が示されている。同書が学生時代から取り組んできた千葉を題材にしたものであることを考えると、戦前に形成された郷土史を新たな形で継承する宣言とも読み取れる。ここで重要なのは、米軍が大日本帝国時代の学知である郷土史の出版そのものを否定していたわけではないということである。

(二) 学生部長へ——学生運動への対応

滝口が新学制のもと取り組んだ主要な校務に厚生補導業務がある。厚生補導業務とは、一九五〇年ごろに占領政策のなかで持ち込まれたSPS (Student Personnel Services) の訳語であり、一九五八年の日本私立学生連盟の資料によれば、戦前の全体主義的な指導を否定しながら「学生に組織だった知識を与えず、学生自身がカリキュラムであり、学生自身が発達を学ぶ⁽²³⁾」と大学当局者たちに理解されていたもので、教員に研究のみならず、民主主義社会にふさわしい「全人」の教育を求めるものである。⁽²⁴⁾ 滝口は一九四八年四月に学生生活課課長、一九五一年一月に学生厚生部部长心得となり、一九五二年五月～一九六二年まで学生生部長としてSPSを推進する箇所の管理職を務めている。また、

学内のみならず、一九五九年ごろは社団法人日本私立大学連盟学生補導委員会委員長を勤め、私立大学間の研究集会をとりまとめる立場にいた。

一九五二年七月一日に文部省・GHQの民間情報教育局・関係大学共催のもので京都・福岡・東京で開催された厚生補導研究会において、米人講師団によるSDSの勧告が行われ、その一項目の学生の政治活動への対処について「学園内にある現在の共産主義的傾向を阻止する可能性のある一つの事項は、政治経済上民主主義の持つ利点を徹底的に信奉し、効果的な集団活動方式によってそれを実証しうる積極的な学生団体が成長を遂げることであろう」としているように、反共政策の一環でもあった。学生生活課や学生生活部は学生運動への対処の中心であり、滝口も校務として学生運動に対処していた。

一九五二年、学生が構内に入った警官二名を取り囲み、警官隊が出動する事態となった「五月八日早大事件」に滝口は学生厚生部長として対処しており、読売新聞の取材に対し「学生にも悪い点はあったと思うが、警官の態度は卑劣極まる、落度があったらなげハッキリさせないのか、私は最後まで冷静に学生を押えてきたがこうなっては致し方ない、無抵抗な私にさえコン棒を揮った暴挙は許さない」とコメントしている。一九五五年、日本共産党の六全協以降の学生運動について論説する記事では、「今までの学生運動に行きすぎがあったというのを理由に、学生運動不要論を叫ぶむきもあるようだがこれは反対だ」として、自治会と文化団体が共催で開催した早稲田祭をひとつの展望として紹介している。学生運動にある種の寛容さを示しつつ、大学当局との共存の可能性を訴えている。

こうした論調はこの時期、滝口特有のものではなく、同じ記事で文部省大学学術局学生課長・西田亀久夫も「問題は運動のねらいより、その進め方だ」としている。また、全学連委員長・田中雄三も逆コースのくいとめに果たした役割を強調しつつ、「日本の政治の動きと学生の願いとが正面衝突してしまったことは率直に反省したい」と、それ

に呼応するような発言が記載されている。一九五八年の厚生補導研究集会の資料に「社会情勢も漸く落着き、学生も静かに勉強にいそむことができる様になり……学生が学生部について注目する様になってきた」³⁰との現状認識が示すように、各大学当局はこの間、運動の沈静化の見通しを共有していたと考えられる。また、「効果的な集団活動方式」への注目は、SPSの路線と重なるものである。

しかし、日米安全保障条約の改定交渉が明らかになるとその情勢も変わり、滝口宏旧蔵資料群に保管されている一九五九年一月三日付けの文部省学術局長からの通知「最近の学生運動について」には、一月の全学連による国会突入を踏まえ、学生運動が「一般社会の秩序を乱すような事態」を生む可能性が指摘されている。「事態」は大学当局が単独で対処できる範囲を超えて行くことになるのである。

除隊した滝口は、占領期に導入された反共政策の一環としての厚生補導のもとで、学生部長として学生運動に対処していた。学知の面から見ると大日本帝国時代のそれを引き継いでいるが、大学の態勢の面では戦前当時の教育を否定ないし反省する理念に基づく校務を遂行していたことになる。それを通じて、学内での立場を築いていったのである。

(三) 安保改定交渉のなかでの八重山学術調査団の結成

一九五九年、滝口は大浜信泉総長から八重山学術調査団の団長就任を持ちかけられる。戦後も一九四九年に利尻島と礼文島を調査するなど北方への関心を持ち続けていたが、千島をソ連が占領し、一九五〇年代を通じて東西冷戦体制が構築されたことでそれは困難になっていた。そのときのことを次のように回想している。

北方の島の島々に興味を持ち、調査などを続けていた私にとって、北の旅が敗戦によってしにくくなったことは、困惑を越

えたものであった。そうしたころ、大浜信泉先生から「南の島を調べてみたら」というお声を承ったときは、心に明るく大きな灯が点ぜられた思いであった。⁽³²⁾

冷戦下において、早稲田大学の八重山調査は、まずは同地が日本の潜在的な主権が承認された米軍の統治下であったからこそ成立したものであるといえる。そして、石垣出身の大浜が総長であったことで、八重山側との信頼関係は作られた。滝口宏旧蔵資料のなかには信泉と調査団の署名が入ったお手拭きがあるが、総長の影響力にあやかり現地配布していたものと思われる。

法学部教授の大浜信泉が総長に選出されたのは一九五四年九月のことである。大浜は一九四六年から理事として大学の中核で意思決定に参加し、一九四七年に早稲田大学教育制度改革委員会委員長、一九四八年に日本学術会議会員になるなどして内外で学制の改革に取り組んでいた。また学制のみならず、一九四八年に参議院全国選出議員選挙管理委員と簡易生命保険及郵便年金審査委員会委員、一九四九年に法制審議会委員、一九五五年にユネスコ国内協力委員会委員へ就任するなどして国内行政や国際的な文化政策に関わっている。さらに、一九二五年に東京八重山郷友会会長、一九三六年～一九四〇年に東京沖縄県人会副会長、一九四六年に沖縄諸島日本復帰期成会に参加、一九五六年に訪米八重山芸能後援会会長、一九五七年～一九六一年に南方同胞援護会会長に就任し、戦前から占領期にかけて地元沖縄との関係を役職者として続けていた。

総長就任の翌年の一九五五年一月二十五日に大浜は石垣へ帰郷している。同時期に、二月二日にUSCAR副長官ダヴィド・オグデン米国陸軍少将が石垣島を視察に訪れ、地方庁舎における懇談会の席上で大浜を激賞しており、ここに米軍政下八重山における大浜の立ち位置を見ることが出来る。二月三日の八重山タイムスの記事によれば、「大浜⁽³³⁾

総長とは種々話し合う機会を得？（ママ）飛行場の都合がよく八重山に廻してあげることができた」「大浜総長に対するオグデン少将の厚遇は新聞等で広く紹介されているが、オグデン機を提供されたほか将官待遇をなし、軍施設を自ら案内してくれ、総長も非常に感激し、帰京の際オグデン副長官は近く八重山視察に行かれるらしいが、是非この好機を捉え八重山開発について充分御願いしてくれと私に依頼された」とあり、大浜はUSCARと深い信頼関係を築き、これを土台に帰郷を果たしていたことが分かる。大浜はこの後、ミシガン協定を結ぶなど、アメリカの大学との提携を軸とした「国際化」を進めて行くことになる。

大浜は、USCARおよび在沖米軍についてのどのように考えていたのだろうか。一九五九年三月六日～二一日にかけて沖縄を訪問した早稲田大学雄弁会の沖縄訪問団が、帰京後大浜と座談会を行っている。⁽³⁵⁾そこで大浜は、「日本本土には、正しいナシヨナリズムの意識がきわめて低調のように思う」としたうえで、沖縄には抵抗運動としてのナシヨナリズムが存在するとしている。そして、「あそこに軍事基地を置いておる、まあ日本内にも置いておるわけですが、それをどう考えるかということに、われわれの考えと違うんです。向こうはむしろ自分たちが守ってやっているんだと思っっているだろ」として、沖縄の米軍統治に対する抵抗運動を肯定的に評価しながら、米軍側の戦略的な立場を分析しつつ、即時復帰は現実的に困難であるとの判断を示している。

大浜の郷土に対する学術調査の構想は、USCARとの信頼関係を前提として、米軍に対する抵抗運動がある面では肯定的に捉える立場から作られていた。こうした立場や経験は、滝口に重なる面が多い。というのは、滝口も占領軍の路線に大学の内外で協力しながら、抵抗運動を条件付きで承認する立場をとり、冷戦下で可能な「郷土」への接近を模索していたからである。それに加えて、学生時代や軍務のなかで調査団への所属や指導的立場の経験がある滝口を大浜は団長に指名し、アジア財団の資金提供のもと、早稲田大学八重山学術調査団が結成されたのである。

三 八重山学術調査団と八重山社会の郷土史

(一) 滝口の八重山認識と調査団

調査団結成当時、滝口は自らの沖縄に対する関心が学生時代に形作られたと回想している。柳田国男らを中心とした郷土史の隆盛を背景に、学内では史学科の先輩で戦後『南嶋入墨考』（一九六二年）を刊行する小原一夫、同期で種子島氏の末裔である種子島時望、文学部教授の西村真次らと交流したことや、高校時代に見た沖縄舞踊の一人の来京⁽³⁶⁾などが挙げられている。また、千島の調査を経てからは、「黒潮文化」との仮称のもとに関心を持ち続けていたとされている。八重山出発前の滝口の琉球認識は次のようなものである。

日本の古代文化を探求する上に、その南の入り口である琉球列島は、北にあるカラフト・千島、西にある朝鮮半島とともにきわめて重要な土地である。しかも離島という性格は、文化の通過点、中継点でもあるともしばしば、そこに滞留したものが隔離された環境の中で古い形をのこし、または特有の発達をしている。⁽³⁸⁾

大日本帝国の内地の境界をなぞる地理的空間に日本文化の古代の存在が仮定され、琉球はその南の入り口であるとし、さらに、離島が隔離された文化の通過点や中継点であるとして、開放性と閉鎖性の両極を持つ特異性が強調されている。そのうえで、戦後における先島諸島の考古学的な成果に触れ、それらが在地の多和田淳によるものが大きいと続く。

そして、研究計画書には「八重山群島および琉球列島」を通過ないし中継する文化として「南方文化圏、中国文化

圏および西欧文化圏」が人文地理学の視点から想定され、「本土に新しい文化を伝える中継地として日本文化に貢献した」と示されている。さらに八重山の特異性として、「八重山における古代文化が沖縄本島以北の縄文系文化に比して時間的に遅れている」という考古学上の仮説が掲げられている⁽³⁹⁾。

原初的な文化の流れを想定する思考は、民俗学における「北上説」「南下説」と親和するものであり、十五年戦争期の民俗学の影響のもので構想された滝口の郷土史の視点が反映されている。こうした仮説をもとに、滝口団長以下西村正衛助教を中心に組織されるのだが、沖縄からは中今琉球大学助教、八重山からは多和田敦琉球政府文化財保護委員が参加しており、沖縄・八重山内部の知見が前提とされている点に特徴がある。対象を一方向的に調査するのではなく、対象から学術的な知見を借りることで滝口や調査団の認識が成立したのである。

(二) 八重山における郷土史とその対立

調査団が石垣に到着したのは八月一三日、一行を出迎えたのは「歓迎早稲田大学学術調査団」ののほりを立てた八重山文化協会のボートだった⁽⁴¹⁾。八重山文化協会は、一九五四年に八重山教育長事務所に設立された文化団体である。教育長の糸数用著を代表として、四つの部局で構成され、第一部長を喜舎場永珣が務めていた⁽⁴²⁾。当時七四歳であった喜舎場は、八重山研究の第一人者として郷土史をリードする立場にあり、一九五四年に初の八重山通史となる『八重山歴史』を八重山群馬島政府の事業として執筆・刊行している。喜舎場は、調査団の案内役を務めた。

八重山文化協会のような、八重山における組織的な郷土史の系譜は、一九二一年に柳田国男が石垣を訪れ、喜舎場らとの交流を続けることで形成された。滝口が高校時代に見た沖縄舞踊の監督を務めたのは当時小学校の教員をしていた喜舎場であり、その実現は柳田の働きかけによるものだった。その後、一九三四年に教員を辞めて郷土史に専念

するようになった喜舎場らを中心に八重山郷土研究会が結成されている⁽⁴⁴⁾。八重山の郷土史は、東京における郷土史の隆盛と連動して展開していた。

八重山の郷土史は、琉球国の王府が八重山に課し、一九〇三年の地租改正まで継続した人頭税を軸に記述される特徴を持っている。『八重山歴史』には人頭税により極度の疲弊がもたらされたとの歴史像が示されており、一九五八年に刊行された『市制十周年記念誌』にも「史家は八重山の近世史はほとんど人頭税史であるといっても過言ではないとのべている⁽⁴⁵⁾」との記述が見られる。琉球大から参加した中今もこの歴史に注目し、牧歌的だと理解される八重山の民謡を庄政の痕跡として分析しながら、「首里王府に頼らない」時代の八重山の独自性に目覚めるべしと問題提起をしていたことから、沖縄の研究者もこの歴史像を共有していた。「遅れ」をキーワードに、沖縄の歴史と八重山の歴史を区分する見方は、考古学のみならず、沖縄・八重山の郷土史ないし歴史研究にも共有されていたのである。

また、八重山の郷土史は一枚岩ではなく、対立や論争が存在した。主要なもの、一九五四年に金関丈夫や国分直一らによる文部省学術研究補助の助成を受けた人類学・考古学・民族学調査団が波照間島で調査を行い、金関が同地の文化が台湾の先住民やインドネシアなどから北上した痕跡があると指摘したことに端を発する「起源論争」である⁽⁴⁶⁾。金関に対し八重山出身で在京の言語学者宮良當壯は、南下説の立場から批判を行った。こうした対立は八重山においても見られ、調査団が帰還したあとも調査を続けた中今、八重山の研究に派閥があり、石垣での調査に困難が伴ったと振り返っている⁽⁴⁸⁾。「起源論争」との関連は不明であるが、滝口らの調査が八重山の郷土史のある特定のグループとの関係のなかで成立したことを示すものである。

戦後、金関の調査団をはじめ、八重山には様々な調査団が入っている。一九五七年～一九五八年にかけて琉球大学・鹿児島大学の共同学術調査団が来島している。後者の共同学術調査団は、衛生、水産、林業など開発に関わる調

査であり、この時期、中心部の開発が一定の水準に到達し、手つかずの西表の開発が課題とされていた八重山にとっては典型的なものである。大学の他にも、一九五六年の日本政府の援護課による資料調査、一九五九年六月の日本政府農林省の灌漑排水調査、同年七月の世界保健機構マラリア支部による調査が行われている。早稲田大学調査団は、金関の調査団と同じく文化を対象としており、開発に直結する課題を設定していない。さらに、USCARとの関係を築いた大浜が発意し、アジア財団による出資を受けていることから、大浜や調査団の意図がどうであれ米国の反共的な文化政策の一環として位置づけられることに特徴がある。

USCARは、八重山米流文化会館を拠点として、児童の演劇などを通じた啓蒙事業を推進していた。一九五九年二月二八日には同会館で、児童が扮する動物たちが「森の国会」を舞台に民主的かつ秩序ある自由を学ぶ演劇⁽⁴⁹⁾や、首里城の舞踊が披露⁽⁵⁰⁾されている。翌年の一九六〇年七月六日に高等弁務官ドナルド・ブース陸軍中将が視察の際、児童らがヘリの前に並ぶ要人らの前で八重山の伝統舞踊を披露した記録も残されている⁽⁵¹⁾。USCARは、一九五六年の沖縄における「島ぐるみ闘争」のあとで、文化への介入や理解により八重山の統治を企図していたと考えられる。

八重山では、戦前から蓄積された研究を基盤として、組織的な郷土史の記述がなされており、そこに生まれる論争が社会の集団のあり方にも影響を与えていた。滝口らの調査は、この社会のなかに参与する行為でもあったのである。そして、そこには冷戦下におけるUSCARによる統治が横たわり、調査団とUSCARは研究成果を共有する関係にあった。他方で、歴史研究の派閥の存在に見られるように、調査団が交渉していない郷土史の存在も垣間見える。

(三) 「早稲田編年」の提唱

早稲田大学八重山学術調査団は調査の結果を一九六〇年刊行の『沖縄八重山』にまとめた。そこで、考古学的成果

としての「編年」を示し、のちに「早稲田編年」と呼ばれるようになる。「早稲田編年」は、西村正衛がまとめた報告や滝口がまとめた結語に示されるもので、西村の報告が土台となっている。考古学編年を第一期～第四期に分け、第一期を仲間第一貝塚（西表）など土器が発掘されず石器のみが出土する時期、第二期を下田原貝塚（波照間）など土器および石器や貝器・骨格器が出土される時期、第三期を山原貝塚（石垣）など鉄器が加わる時期、第四期を近世期と位置づけ、とりわけ第一期が八重山の考古学的特徴であるとしている⁽⁵³⁾。この編年は、一九七八年の沖縄県教育委員会調査が第一期と第二期が逆転するまで、約二〇年のあいだ八重山の考古学的な編年として定着し、考古学上の八重山文化の特異性を決定づけたものである⁽⁵⁴⁾。

西村は、仲間第一貝塚から出土した片刃の石斧に注目し、類似のものが縄文文化期の関東や東北、弥生文化、そして「外地では、沖縄本島、朝鮮、台湾、中国の広西、フィリッピン、紅頭嶼、印度支那、サイパン、ロタ、テナンの島々、またはポリネシア文化」などに見られるとし、大日本帝国の地理空間把握を援用しながら考察をしている。そのうえで、より特徴を共有するものが、インドのホアビニアンおよびバクソン文化の石器であり、これらは「北方的要素」が見られないとしている。さらに、台湾考古学との関係を考慮する必要があるとしつつ、にわかに「南支・印度支那」と結びつけることには慎重を期さねばならないとした⁽⁵⁵⁾。

滝口は本調査を「日本文化の一環としての研究」とすることに重点を置いたことを協調しつつ、地理的な文化の流れについて言及している。無土器の期間を太平洋諸地域でみられる原始的文化のひとつとして位置づけ、次の段階としての土器の出現の要因を外からの刺激と生活上の必要に求める。島外との交渉が多くなる事に土器の必要が増してゆき、次第に「中国文化」や「奈良文化」との交渉をもつとの推論が示される。そして、「八重山をとりまく海は、東からの西からの、文化の流れを妨げていたが、それは絶対的の障害だったともいえない」として、外との交渉

の「遅れ」を地理的要因から説明した見解を示している。⁽⁵⁵⁾

滝口に率いられた早稲田大学八重山学術調査団は、八重山の郷土史に知見・研究体制の両面で支えられながら、「早稲田編年」を提唱するにいたった。滝口らの視点と喜舎場ら八重山郷土史の視点は、一九三〇年代の民俗学的な郷土史の枠組みに強く影響を受けた点で親和性があり、文化の地理的な空間とその流れに注目しながら原初的な形態を求める「早稲田編年」の枠組みもそれに重なるものである。また、『沖繩八重山』の出版費は「大濱先生のお力によりアジア財団から援助された金をそれにあてた」ことで捻出され、翌年に滝口、西村は、米国の沖繩研究者ジョージ・カーを中心とする調査団に招かれ再度調査を重ねており、調査団の見解が米国の意思に反するものではないことが分かる。「早稲田編年」は、大学のみならず占領下の地域社会のなかにも温存されていた大日本帝国時代の学知の枠組みを両者が援用し、それが米国の承認と支援を得ることで成立したのである。

おわりに

滝口が戦前に形成した大日本帝国の地理的境界を想定する郷土史の枠組みは、大日本帝国の解体により植民地が解放され、沖繩や千島が切り離されてからも温存され、USCARによる八重山の占領政策の一環として活かされることになる。また、系譜を同じくする学知は、大学のみならず占領下の八重山の地域社会のなかに対立を含みながら温存され、行政や文化団体が中心となり、調査団が来る前から独自の成果を蓄積していた。調査団はこの蓄積をもとに、独自の考古学的成果である「早稲田編年」を提唱することになる。

局地的な調査を行う郷土史の学知的な構成が、広域な地理空間を想定するのは、大日本帝国であれ、米国の世界戦

略であれ、それが帝国の統治に関わる研究の一環として位置づけられることで形成されてきたという要因があるだろう。早稲田大学八重山学術調査団は、極地における軍務や学生運動への対処など、統治に関わる仕事の経験を積んできた滝口に率いられたという点で、郷土史の社会における位置づけをよく現すものであったといえる。

しかし、八重山社会の郷土史が生んだ対立のなかで、大学に対して非協力的な派閥が存在したように、調査を支えたのが大日本帝国であれ米国であれ、郷土史は必ずしも統治の意思に串刺されているものではない。こうした外部の姿を明らかにすることで、滝口の郷土史の傾向のみならず、大学の調査研究の歴史的な性格がより明確なものになるだろう。

やなぎ・ひろあき（早稲田大学歴史館嘱託職員）

註

- (1) 坂野徹、二〇一二、『フィールドワークの戦後史』宮本常一と九学会連合』吉川弘文館。
- (2) 道場親信、二〇〇五、『占領と平和…戦後』という経験』青土社。
- (3) 門田岳久、二〇二三、『宮本常一〈抵抗〉の民俗学』地方からの叛逆』慶應義塾大学出版会。
- (4) 滝口寿満子編・滝口宏著、一九九八、『勁草―滝口宏随想録』滝口寿満子…二七九。
- (5) 朝日新聞、一九三四年二月一五日東京朝刊一一頁。
- (6) 一九三四年八月二八日読売新聞夕刊二頁。
- (7) 滝口寿満子編・滝口宏著、一九九八、『勁草―滝口宏随想録』滝口寿満子…一四三。
- (8) 滝口寿満子編・滝口宏著、一九九八、『勁草―滝口宏随想録』滝口寿満子…三二。
- (9) 滝口宏編、1986、『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集』早稲田大学出版会…七二九頁。
- (10) 早稲田大学百五十年史編纂委員会編、二〇二二、『早稲田大学百五十年史 第1巻』早稲田大学出版部…一一八四。
- (11) 一九四九年に『千葉県郷土読本』(info:dljp/pid/2989646)。

- 一九五〇年に『太陽系とこよみ（ぼくたちの研究室）』
 (infondjp/pid/1653284) を刊行してゐる。
- (12) 早稲田大学五十年史編纂委員会編、二〇二二、『早稲田大学五十年史 第1巻』早稲田大学出版部：一一三六—一四一。
- (13) 早稲田大学史編集所、一九八七、『早稲田大学百年史 第3巻』早稲田大学出版部：九三七。
- (14) 早稲田大学史編集所、一九八七、『早稲田大学百年史 第3巻』早稲田大学出版部：九三三。
- (15) 一九三八年九月二日朝日新聞夕刊一頁。
- (16) 滝口宏編、1980、『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集』早稲田大学出版会：七二九。
- (17) 滝口寿満子編・滝口宏著、1998、『勁草—』滝口宏随想録』滝口寿満子：一四三。
- (18) 『山光集』43頁、155。(infondjp/pid/1127789)
- (19) 滝口寿満子編・滝口宏著、1998、『勁草—』滝口宏随想録』滝口寿満子：一六。
- (20) 早稲田大学史編集所、一九九二、『早稲田大学百年史 第4巻』一五六。
- (21) 滝口宏編、一九八〇、『古代探叢』滝口宏先生古稀記念考古学論集』早稲田大学出版会：七二九。
- (22) 平野元三郎・滝口宏著、一九五三、『千葉県郷土読本改訂版』寧楽書房：四。(infondjp/pid/2989646)
- (23) 平野元三郎・滝口宏著、一九五三、『千葉県郷土読本改訂版』寧楽書房：七。(infondjp/pid/2989646)
- (24) 日本私立学生連盟編、一九五八、『第三回厚生補導研究集会フレッシユマン資料』SSの理念とその実際』（滝口宏旧蔵資料）…八。
- (25) 日本私立学生連盟編、一九五八、『第三回厚生補導研究集会フレッシユマン資料』SSの理念とその実際』（滝口宏旧蔵資料）…六。
- (26) 一九五九年五月八日「第十七回学生補導委員会開催の件」(滝口宏旧蔵資料)。
- (27) 厚生補導研究会運営委員会・文部省大学学術局学生課編、一九五八、『日本の大学における学生の米人講師団の勧告』…二一。
- (28) 読売新聞 一九五二年五月九日朝刊三頁。
- (29) 読売新聞 一九五五年一月一八日朝刊八頁。
- (30) 日本私立学生連盟編、一九五八、『第三回厚生補導研究集会フレッシユマン資料』SSの理念とその実際』（滝口宏旧蔵資料）…一四。
- (31) 滝口寿満子編・滝口宏著、一九九八、『勁草—』滝口宏随想録』滝口寿満子…一四九。
- (32) 滝口寿満子編・滝口宏著、一九九八、『勁草—』滝口宏随想録』滝口寿満子…二五六。
- (33) 竹富町史編集委員会町史編集室、二〇〇一、『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成Ⅳ』竹富町役場：六七五。
- (34) 記者のこと。

- (35) 早稲田雄弁会編、一九五九、『早稲田雄弁 副官第一号沖繩特集』早稲田大学雄弁会。
- (36) 滝口寿満子編・滝口宏著、一九九八、『勁草——滝口宏 随想録』滝口寿満子：二五四。
- (37) 早稲田雄弁会編、一九五九、『早稲田雄弁 副官第一号沖繩特集』早稲田大学雄弁会：二八。
- (38) 早稲田雄弁会編、一九五九、『早稲田雄弁 副官第一号沖繩特集』早稲田大学雄弁会：二八。
- (39) 滝口宏編、一九六〇、『沖繩 八重山』校倉書房：五〜六。
- (40) 滝口宏編、一九六〇、『沖繩 八重山』校倉書房：四。
- (41) 滝口宏編、一九六〇、『沖繩 八重山』校倉書房：四。
- (42) 市制十周年記念誌編纂委員会、一九五八、『市政十周年記念誌』石垣市役所：四。
- (43) 一九五二年に琉球政府が行政を統合するまえに存在した八重山の行政府。
- (44) 三木健、二〇〇三、『八重山研究の歴史』南山舎。
- (45) 市制十周年記念誌編纂委員会、一九五八、『市政十周年記念誌』石垣市役所：二五〇。
- (46) 竹富町史編集委員会、二〇〇三、『竹富町史 第十一卷 資料編 新聞集成Ⅴ』竹富町役場：五〇二〜三。
- (47) 三木健、二〇〇三、『八重山研究の歴史』南山舎：七三〜八二。
- (48) 竹富町史編集委員会、二〇〇三、『竹富町史 第十一卷 資料編 新聞集成Ⅴ』竹富町役場：五〇三。
- (49) 沖縄県公文書館所蔵“Parliament of Forest” - play by Takenoko-kai at Yaeyama Cultural Center”。(USCAR広報局写真資料076 資料コード：0000213561)
- (50) 沖縄県立公文書館所蔵“Shuri Castle Dance by Heishin Primary School's Pupils at Yaeyama Cultural Center”。(USCAR広報局写真資料076 資料コード：0000213561)
- (51) 沖縄県立公文書館所蔵“HICOM Tours Yaeyama”。(USCAR広報局写真資料106 資料コード：0000112092)
- (52) 滝口宏編、一九六〇、『沖繩 八重山』校倉書房：一五五〜一七三。
- (53) 沖縄考古学会編、二〇一八、『南島考古入門』ポーター インク：一一七。
- (54) 滝口宏編、一九六〇、『沖繩 八重山』校倉書房：二六一。
- (55) 滝口宏編、一九六〇、『沖繩 八重山』校倉書房：二六九。
- (56) 滝口寿満子編・滝口宏著、一九九八、『勁草——滝口宏 随想録』滝口寿満子：二五七。